リリカルなのはANOTHER STORY～闘いのREASON～

ヨウラン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリカルなのはＡＮＯＴＨＥＲ　ＳＴＯＲＹ～闘いのＲＥＡＳＯＮ～

【Ｎコード】
Ｎ０４４７Ｈ

【作者名】
ヨウラン

【あらすじ】
なのは達が闇の書事件を解決した少し後の話アースラのメンバーが任せられたある事件からのストーリー

プロローグ

幾つものＩＦの世界の内の一つの世界

その世界で小学三年生の少女が魔法に出会い、多くの出会いを繰り返し強く逞しく生きていた。

しかし、その裏で多くの闇が蠢き己の欲を満たさんが為に行動していた。

１人の両親を失いし者、それもその闇が生んだ犠牲の一つであった。

第一話：作戦の始まり

「クソッ！また遅れた！」

時空航行艦アースラのブリッジで漆黒のバリアジャケットを纏った少年［クロノ・ハラオウン］がどくづいた。

ウィーン

ブリッジのドアが開き金髪の少女［フェイト・T・ハラオウン］がやってきた。

「クロノ、現場の救助活動は終わったよ」

「いったい、どうやって時空間を移動しているんだ！？」

フェイトがクロノに話しかけるが、他のことを考えているらしく聞いていない。

「フェイトちゃん、報告書はそこに置いといて、後でクロノが読むから」

アースラのオペレーター［エイミィ・リミエッタ］がフェイトに助け舟を渡す。

「しかしながら、今回も死傷者数０だって？」

「ええ、いったいどうやったら、非殺傷設定でも怪我人位なら普通でるのに…」

フェイトは今回の事件に多くの疑問を抱いていた。それもその筈、今回の事件は数々の時空世界の事件を効率的に解決するために各々の世界に設置した時空管理局の支部が何者かによって次々と破壊されているのであった、それも、死傷者数０で。

しかも、犯行スピードが並ではなく、管理局の治安部隊や、時空航行艦が着いた頃には既に犯人は次の時空に移動しているのであった。

「とりあえず、次の出撃の為にちょっとでも休んでた方がいいよ」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

ウィーン

フェイトが自室に向かう廊下を歩いている途中、少し茶色がかった髪をツインテールに束ねた女の子［高町なのは］とすれ違った。

「あっ！フェイトちゃん、今回の事件について、ユーノ君にお願いしてたんだけど、関連性のありそうな資料が見つかったんだって！」

「本当に！？」

「うん、明日にはアースラに届けに来るんだって」

フェイトはその言葉を聞きホッとした様子だった。

そして、ー翌日ー

「皆、久しぶりだね」

「ユーノ君、久しぶり」

「そうだね、久しぶりユーノ」

「それよりも早く今回の事件に関連性のある資料とはなんだ？」

クロノのその台詞を聞きユーノは持ってきていた、一冊の本を広げた。

「これは、聖王時代のベルカの歴史書なんだけど、2代目の聖王の記述のところにこんな記述があるんだ

『時空の歪みから現れし騎士、圧倒的な力を用いて聖王になる。その騎士、夜天を創造し、騎士の栄光は永久なるものと思われた。だか、時空の歪みがまた現れし時、騎士は時空の歪みと共に消え失せた』

この時空の歪みって時空間の移動のことじゃないかと思ってさ」

「その可能性は否定出来ないが、そんな過去の物が現代に在るのか？」

ユーノの説にクロノが反論する。

「どちらにしろ、この時代の聖王は自由に時空間を移動できる本があるって記述も在るから間違いはないと思う」

「でも、時空間を単体で移動する相手にどうすればいいの？」

ユーノの言葉で喜んでいたメンバーがなのはの言葉にため息をついた。

「それに関しては、比較的簡単な作戦を僕とエイミィで組んだ、今日はこれからその作戦の為にある時空にでたいと思う」

そうして、なのは達の戦いが幕を上げた。

第二話：仮面の破壊者

……

アースラの艦内は静寂に包まれていた。

その時、なのはが口を開けこう言った。

「暑い…」

その言葉を合図に皆が口々に

「暑い」

「熱い」と言い始めた。

「というわけでアイスを買ってくるのはなのはちゃんね♪」

エイミィの言葉を聞き、真っ白に燃え尽きたなのはがいた。

遡ること前話が終わってすぐ

「犯人を捕まえる作戦なんだけど、待ち伏せをする事にした」「追っても追いつけないんだし当たり前って言ったら当たり前なんだけどね」

と、言うことで待ち伏せ作戦が敢行されることになり、アースラはある管理局支部に留まっていた。

しかし、その管理局支部は砂漠の真ん中に建てられており非常に暑いのだ。

普段のアースラなら冷房をつけて済ませるが、運悪く冷房が故障中で、暑さで全員が死にかけていた。

しかし、管理局支部の中の売店には冷たい冷たいアイスが売っているのだ。

しかし、管理局支部に行くためには一度、アースラを降りて灼熱地獄の砂漠の上を少し歩き、帰りはアイスが溶けないように全力疾走して帰らねばならぬのだ。

そして、誰がアイスを買いに行くか決めるために戦いが始まったのだ。

ルールは簡単アースラのブリッジから出てはならず、

「暑い」と一言も言ってはいけないという我慢対決だった。

そして、現在に戻る。

因みに、最初に
「暑い」と言ったユーノはブリッジの隅っこで枯れ果てている。

そして、今回はなのはの番になったのだった。

アースラから降り立ち、管理局支部に向かって走り出す。

管理局支部売店

「死ぬかと思ったの～」

そこには、燃え尽きた管理局の白い悪魔がいた。

「おばちゃん！とりあえずガ〇ガリ君ください！」

「あいよっ！」

ジリリリリリ！

売店のおばちゃんが、なのはに頼まれた数のアイスを持ってきた時、
警報が鳴り響いた。

『なのはちゃん次元震が発生！もしかしたら、ビンゴかも！』
急遽繋がったエイミィからの念話に多少戸惑いながらも出撃した

なのはがバリアジャケットを装着して現場に着いた時、そこには仮面を付けた、なのはと同じ位の少年魔導師が管理局支部を破壊していた。

『こちら高町なのは、目標を視認しました。』

『了解、一応降伏勧告してみて』

エイミィへの念話を切るとなのはは少年に降伏勧告をした。

「そこの君！管理局支部への攻撃は次元世界平定の妨害にあたります。
今すぐ、降伏すれば貴方には弁明の許可が与えられます。
こちらの降伏勧告に応えるならば武装解除をお願いします。」

「……」

少年は無言でなのはの方を向き、手に持っていた銀色の槍を構えてなのはに攻撃してきた。

「くうっ！やっぱり簡単には降伏してくれないか…」

少年の攻撃を素早く横にステップして避ける。

しかし、少年はなのはの方向に振り向き次々と攻撃を仕掛けてくる。

右払い、左薙ぎ、突き、多種多様な攻撃を驚異的な速さでしてくる少年になのはは段々と後退させられていった。

しばらく、なのはは防戦一方になっていた。

しかし、なのはが攻撃を受けながら密かに打ち出していた魔力スフィアを少年の左右に大量に展開し少年に向けて一斉に放った。

それらは全て少年に直撃し、辺り一帯に大きな砂煙を巻き上げた。

なのはの砲撃は一発一発が圧倒的な破壊力を持った一撃だ、並みの魔導師なら一撃で戦闘不能になってもおかしくない一撃をなのはは少年に向けて大量に放った。

普段ならここでほぼ任務終了なのだが、砂煙から出てきたのは『回し蹴り』だった。

なのははその回し蹴りをモロに受け、その勢いで後ろにあった大岩に背中からぶつかる。

その後、砂煙から出てきた少年は小さく呟いた。

「久々に受けたいい一撃だった。だが、俺には届かない」

そう言うと、少年は槍を振り上げ、なのはに向けて振り下ろした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0447h/

リリカルなのはANOTHER STORY～闘いのREASON～

2010年10月21日22時19分発行